

ト骨

国内最多の出土数

動物の骨を用いた占いを骨トといい、これに用いられた骨をト骨といいます。弥生時代に大陸から伝わった占いで、主にシカやイノシシの肩甲骨を用い、その表面に先端が焼けた棒のようなものを押し当てて点状に焼き、生じるヒビの入り方を見て吉凶を占うものです。青谷上寺地遺跡では、ト骨が今のところ250点確認されています。国内最多の出土数です。

古い段階では肩甲骨の一番厚みのある部分を焼きますが、やがて厚みが薄い部分を焼くようになります。また、肩甲骨の大きな突起（肩甲棘）を削ったり、骨の表面を擦って磨いたりといった加工が行われます。時代が新しいものほど、削って薄い板状にする傾向があり、焼く箇所も多くなります。

何を占ったか

弥生人がト骨で何を占ったのかについては、「魏志倭人伝」に以下の記載があります。「その地（倭国）の風習として、何かをしようとしたり、どこかに出かけようとする場合には、必ず骨を焼いて吉凶を占う。」

何かを判断しようとする場合や、何かの行動を起こす場合に骨トを行ったようですが、具体的な内容は明らかではありません。おそらく青谷上寺地遺跡では、航海の安全が大切な占いのテーマであったことでしょう。

海を越えた骨トの作法

青谷上寺地遺跡のト骨は、多くが溝の中などに廃棄された状態で見つかっています。用を終えたト骨は捨てられたようですが、青谷上寺地遺跡では意図的にト骨を集め置いた「ト骨集積遺構」が確認されています。イノシシの左右の肩甲骨2枚を1組とし、これを重ね合わせる面や向きを合わせて3組並べています。こうした配置にどのような意味があるのかは今後の研究課題ですが、こうした例は、青谷上寺地遺跡以外では、韓国慶尚南道の勒島遺跡で知られているだけです。このような占いのやり方にみえる共通性は、両地域の密接な関係を表しているものと思われ、物の流通だけでなく、精神文化の交流があったことも窺われます。



青谷上寺地遺跡のト骨



青谷上寺地遺跡のト骨集積遺構

